

日英翻訳における受容化と異質化について (1)

— 吹き替え映画翻訳の認知言語学的事例研究 —

貞光 宮城 (大学院創成科学研究科 工学系)

On Domestication and Foreignization in Japanese-English Translation (1): A Case Study of Film Dubbing from a Cognitive Linguistics Perspective

Miyagi SADAMITSU (Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Engineering Department)

Abstract: This paper deals with Venuti's (1995) controversial issue on domestication and foreignization in translation. As a case study, a dubbed film from Japanese into English is analyzed especially in terms of the gaps in language/culture and in time between the source and the target text. Thinking of the nature of translation, which is the act of rendering the translator's construal of a text in one language into another, it is quite natural to presume that domesticated translation samples should be found more than foreignized ones. This paper demonstrates the tendency clearly by analyzing each and every line of the dubbed film and discusses the reasons for the results by observing the actual translation data.

Key words: translation, translatology, domestication, foreignization, film dubbing, Cognitive Linguistics

1. はじめに

宮崎 (2015)¹ は山本周五郎の作品 (時代物) の英訳を実践する中で、難渋する点の1つに以下のような2つの大きな「距離」の存在を指摘している。²

- (1) a. (地理的) 英語圏と日本
- b. (通時的) 江戸時代と現代

本稿ではこれらを以下のように呼ぶことにする。

- (2) a. 言語圏の隔たり (= 1a)
- b. 時間の隔たり (= 1b)

この2つの隔たり (距離) について、実際の翻訳事例を分析することが本稿の目的である。これを Venuti (1995)³ の受容化 (domestication) と異質化 (foreignization) の観点から分析する。

Venuti (1995) は、翻訳行為を文化・社会の中でイデオロギーの観点から論じ、英語圏の商業的翻訳出版において、読者中心主義に根ざした受容化の方略に基づいた翻訳が支配的であることを指摘した。そこではあたかも翻訳作品が最初からまるで英語圏の作品であったかのような、それを翻訳した者がいなかったような (invisible) 状況が生じていると論じた。その対極を成す翻訳の方略を異質化としている。この受容化と異質化がどのような状況で生ずるのか、小倉 (2008)⁴ は「法則」のかたちで以下のようにまとめている。

- (3) a. 異化・同化の第1法則 (異化の法則)
 翻訳者 (編集者も含む) の重点が、TL の読

者よりもむしろ source text/culture にあるとき、TL における「異化」 (foreignization) が起きる。その際、翻訳者 (編集者) の source text/culture に対する敬意 (respect) が大きければ、大きいほど「異化」の割合が大きくなる。

- b. 異化・同化の第2法則 (同化の法則)
 翻訳者 (編集者も含む) が、source text/culture よりも TL の読者を意識し、よりわかりやすい TL (target language) の翻訳を作ろうとすると、「同化」 (domestication) が起きる。その際、読者が、source text/culture に対する知識が少なければ少ないほど (そのように翻訳者・編集者によって意識されればされるほど)、「同化」の割合が大きくなる。

(小倉 2008: 63)⁵

本稿では、この受容化と異質化がどの程度起こっているのか、どういったところで生じるのか、またなぜそうなのかという点について、日本語から英語に翻訳 (より具体的には吹き替え映画翻訳) された一作品を取り上げ考察する。

2. 分析対象

本稿で分析対象としたのは、起点テキストが宮崎駿監督作品『となりのトトロ』(1988年)で、英訳された目標テキストは Walt Disney Home Entertainment 版の *My Neighbor Totoro* (2005年) である。

この作品を取り上げたのは、起点テキストの時代設定が1950年代の日本 (東京近郊) となっており、これを現代 (翻訳当時 2005年) の英語圏に公開す

るに際し、上述の (2a, b) を考察する上で、どのような翻訳が行われているかを観察できると考えたからである。

また、映像吹き替え翻訳を選んだ理由としては、映像があることによってそれだけ翻訳におけるシフト(ズレ)が制限され、より起点テキストに根ざした翻訳となるのではないかと考えられるためである。さらに、映像があることで、現代にないもの、英語圏にないものといった事物に関する説明が比較的容易(あるいは不要)となるはずである。いわゆる説明的な翻訳が最小限に抑えられると考えられるからである。

さらに、この作品に先立つ『風の谷のナウシカ』(1984年)の翻訳問題を受けて、⁶ それに続く本作品の翻訳に関しては、原作である起点テキストを可能な限り尊重した翻訳になっているはずと考えられるためである。

そして、山田(2005)⁷ や深谷(2010)⁸ といった先行研究がすでに成されていることが本稿の大いに助けになっていることは言うまでもない。

3. 分析方法

まず、起点テキストと目標テキストで翻訳対象となる部分を一つひとつ比較・特定し、⁹ それを文単位で数え上げる。¹⁰ 次に、上述の(2a, b)の観点に基づいて、次の5つのグループに分類する。

- (4) a. 言語圏の隔たりに起因する、
 ・受容化
 ・異質化
 b. 時間の隔たりに起因する、
 ・受容化
 ・異質化
 c. 上のaにもbにも分類できないもの

ここでは、起点テキスト(日本語)と目標テキスト(英語)で客観的な伝達情報にズレがあるものを採取している。両テキストにおいて、言語情報の提示順、構文、等の違いがあってもカウントしていない。また、以下のような慣用的な例も算入していない。

- (5) ただいま。
 I'm home. (00.35.54)¹¹

これらは、情報伝達上<帰宅時のあいさつ>という同じ機能であり、伝達情報にズレはないものとみなされる。¹² Nida(1964)の動的等価(dynamic equivalence)であると考えられる。¹³

なお、(4c)のグループには、翻訳の過程で情報が付加された場合も、損失があった場合も含まれる。例えば、以下のような例である。

- (6) 部屋の中にドングリが落ちてるの。
 Hey, Dad, acorns are falling from the ceiling..

(00.07.02)

- (7) 行けばすぐわかるよ。
 Can you find the back door?

(00.07.28)

例(6)で、「落ちてる」ことを falling from the ceiling(天井から落ちてくる)と翻訳されている。また、例(7)では、陳述が質問に変わっている。これらが、受容化であるか異質化であるか、分類することは不可能であると考えられる。さらに、次の例のような情報の損失も、ここでの分類には該当しそうもない。

- (8) お弁当さげて、どちらへ?
 Are you going somewhere? (00.26.42)

起点テキストでは、未就学児(設定では4歳)に対してあたかも大人(かあるいは少なくともある程度大人に近い人)に向けて話しかけるように、敢えて「お弁当をさげて」どちらへお出掛けになるのかと尋ねるところに、皮肉の込められたおもしろさがある。しかし、目標テキストではその部分は翻訳されていない。¹⁴ この情報の損失が受容化/異質化のどちらに基づくのか、判断するのは不可能であると考えられる。

4. 分析結果

前節の分類結果をまとめたものが以下である。

- (9) 分析対象となる全台詞数

起点テキスト	目標テキスト
732	843

- (10) a. 言語圏の隔たりに起因する受容化/異質化

受容化	異質化
53	1

- b. 時間の隔たりに起因する受容化/異質化

受容化	異質化
2	1

- c. 上のaにもbにも分類できないもの

128

これを元に、次節で考察する。

5. 議論

前節で得られた結果を、全体について、言語圏の隔たりに起因するものについて、そして時間の隔たりに起因するものについて、それぞれ以下で議論する。

5.1 全体数

分類結果 (9) によると、上でも触れたことであるが、英語の目標テキストの方が言語で表現される量が相対的に多くなっている。その要因として2点挙げておく。

1つ目は、単位時間当たりの伝達情報量の違いである。ここで算出したのは言語ごとの「文」の数で、これが直ちに伝達情報の量であるとは言えない。現状では今回の分析において感じられる単なる印象の域を出ないが、単位時間当たりの音声伝達情報量に違いがある（英語の方が多）いようである。¹⁵ 次の5.2でも述べるが、例えば、以下のような例が随所に見られる。

- (11) この家を管理されてる、隣のおばあちゃんだよ。応援に来て下さったんだ。

Girls, this is our new neighbor. She takes care of this house. She said you can call her “Granny” if you like.

(00.13.45)

- (12) お父さんは、この木を見て、あの家がとっても気に入ったんだ。

When I saw this tree, I knew this would be a good place for our family to live.

(00.40.24)

同じ割り当てられた時間の間に音声で伝達される情報が、英語の方がより具体的で伝達内容が多くなっている傾向がある。とりわけ映像吹き替え翻訳の場合は、映し出される口の動きに合わせるようにするため、上の例 (11) や (12) でもそうであるが、大幅な時間のズレは生じないように配慮され、翻訳が成されている。この言語間の伝達情報量の差がこの結果を生んだものと考えられる。

さらに大きな要因として、次の5.2で議論する言語圏の隔たりに起因する受容化の多さがある。一般に、起点テキストよりも目標テキストの方が長くなる傾向にあると言われている。それは取りも直さず、読者（視聴者）に誤解なく分かりやすく伝えるという必要性にかられてのことである。これが受容化となって現れることは当然のことと言える。

こうしたことが、上の分類結果 (9) に表れたものと考えられる。

5.2 言語圏の隔たりに起因する受容化／異質化

そもそも翻訳すること自体が受容化であるという考え方があることからすれば、分類結果 (10a) は全く驚くに値しないことであるとも言える。¹⁶ この受容化が圧倒的に多い要因として、ここでは3点述べる。

1つ目は、5.1で触れたことである。翻訳者は、起点テキストにおいて読み取った内容をできるだけ誤解なく、分かりやすく読者（視聴者）に伝えようと目標テキストを作成していく。そのために、起点テキストでは言語化されていない（翻訳者が読み取った）情報（construal）も、必要とあらば、目標テ

キストでは言語で提示していくことになる。次の例もそれを表している。

- (13) よろしくお願ひしませーす。

Why don't you and your family stop by sometime?

(00.03.51)

日本語話者にとっては引越してきた場面で「よろしく」と言えばそれで十分事足りるはずである。そこを英語ではより具体的に表現していくことになる。¹⁷

2つ目として、日英両言語の言語学的な特徴の違いが挙げられる。上の例とも関連するが、日本語は英語に比べて文脈依存の傾向が強い言語であると言われている（久野 1978、西光 1987、他）。¹⁸ そのため、同じ場面を英語で表現する場合には、文脈依存の度合いを下げ、より明示的に表現するようになる。例を見てみよう。

- (14) ちょっとそこまで。

I'm just off to run some errands.

(00.26.43)

- (15) 少しずつ、ならすんだって。

The doctor wants her to get used to the new house a little at a time.

(01.04.01)

- (16) もしかしたら、お母さん…

Maybe she's dead already.

(01.09.48)

ここで全ての例を挙げることはできないが、上の(14) - (16)のように、起点テキストでは言語化されていない動作主や行為の対象、その内容、さらに省略されている箇所等を把握した上で、翻訳者は目標テキストに提示することになる。

次の例のように、言語間での認識の仕方がその言語化に認知的に影響を与える傾向の違いが表れているとも言えるものもある（Nisbett 2003、Nisbett and Masuda 2007）。¹⁹

- (17) サツキさんのお家は、お母さんが入院されていて大変なんです。みなさん、仲よくできますね。Satsuki's mom is in the hospital, so her sister Mei is going to stay with us today, okay, class? Let's make her feel welcome.

(01.09.48)

ここで、日本語では主体であるはずのメイについては言及されておらず、その周りの状況のみを言語化している。それで察することができるというわけである。一方英語では、主体である Mei がどうするかをはっきりと言語で明示している。

3つ目として、上述の Venuti (1995) が指摘するように、言語間の社会的・文化的力関係が影響していると考えられる。世界的に見て英語は影響力の強

い言語であり、それに比べて影響力の弱い日本語からの翻訳となれば、英語の方に合わせていく傾向が強くなる。さらに、小倉（2008）が「同法の法則」で述べるように、読者（視聴者）の多くが日本（しかも 50 年以上前）の事情に詳しくないかもしれないとなれば、この受容化の傾向は強くなると考えられる。例としては以下のようなものがある。

- (18) 先生！
Miss Hara!
(01.03.55)
- (19) メイのおフトンで一緒に寝るんだよ！
She's going to sleep with me in my bed!
(01.03.55)

例 (18) について、原作の設定では担任の先生の名前は「森山玲子」となっているが、英語ではより短く発音しやすい名前に変更されている。その他、呼称のズレについては、柏木（2016）で詳しく分析されている。²⁰ また、例 (19) にあるように、日本独特の事物（ここでは布団）も英語圏でそれと対応するもの（bed）に置き換えられている。²¹

その他、言語圏の隔たりに起因する受容化には、日本の地名や植物名を、固有名ではなく一般名詞に変更したり、削除することによって英語圏の人たちに分かりやすくしたと考えられるところがある。

- (20) ササの葉でくるんで、竜のヒゲで縛ってある包みでした。
It was wrapped in a bamboo leaf and tied with a ribbon made of grass.
(00.55.38)
- (21) さっき、神池でサンダルが見つかったんだ！
A little while ago, they found a sandal in the pond.
(01.14.28)

それぞれ、起点テキストで用いられた植物名や地名の日本語によって、そこから喚起される心的イメージは、目標テキストにおいて一般的な用語に置き換えられることによって、大きく失われることになる。それでも視聴者の分かりやすさの方を選択したということである。これらを含め、言語圏の隔たりに起因する受容化については稿を改めて論ずる予定である。

一方、言語圏の隔たりに起因する異質化が少ない結果であったことについて考えてみよう。見つかった例は以下の 1 例だけであった。

- (22) Don't forget to take your shoes off, girls.
(00.06.22)

ここで日本語の起点テキストが空欄になっているのは台詞がなかったことを意味している。つまり、この情報は英語の目標テキストで全て追加されたもの

である。これはお父さんが子ども達に言っている台詞である。日本では（伝統的に）家の中では靴を脱ぐということはかなり英語圏にも浸透していると考えられるが、（視聴者の多くが小さな子どもであることを考慮してか）加えられている。

小倉（2008）が「異法の法則」で述べるように異質化が生ずるのであれば、1つの作品の翻訳で受容化と異質化が同程度に起こっているのであろうかと考える向きもひよっとするとあるかもしれない。しかし実際は、(Nida (1964) の言う形式的等価 (formal equivalence) の立場を貫く翻訳でない限りは) 現代ではそのようなことはなかなか起こり得ないと思われる。というのも、何はともあれ目標テキストの読者（視聴者）に理解してもらわなければならないからである。その理解に一々負担がかかるような翻訳となつては、翻訳の本来の意味である伝達（コミュニケーション）に支障を来すことになる。そのため、異質化は必然的に頻繁には生じ得ない定めとも言える。宮崎（1998）²² はこれを「ご飯と一緒に小石を噛むような感覚」と喩えている。つまり、全体的には作品（ご飯）として味わえるものになっているからこそ、そこにごく稀に異なるもの（小石）と出会うことによって、その違いが際立ち、生きてくる。だからこそ、異文化をより強く印象付け、感じ取れることになるのである。

5.3 時間の隔たりに起因する受容化／異質化

こちらの方も 5.2 同様、受容化が相当数観察されると想定していたが、ごく少数に留まっている。これは、1つには、映像情報でその多くがすでに伝達され、現代とは異なっている事物について敢えて言語で説明する必要がなくなっていると考えられる。受容化の例から見てみよう。

- (23) お天道さま、いっぱいあびてっから、身体にもいいんだ。
They've soaked up lots of vitamins and sunshine.
(01.03.42)

目標テキストでは vitamins への言及があるが、起点テキストにはない。これは明らかに現代人の視聴者が理解しやすいようにと付加された情報である。この台詞を発した「おばあちゃん (Granny)」は、設定された 1950 年代時点で（恐らくは）60 歳を優に超えていると見られる。当時はテレビもないという設定であり、「ビタミン」という用語がこうした所謂ごく田舎の地域で人口に膾炙していたとは考えにくい。ましてや、日常会話でそれを小さな子ども達に向けて用いていたというのは考えにくい。しかしながら英語の目標テキストではこの情報が追加されており、50 年前（の設定）のことでありながら、現代と似通った状況を作り出し、視聴者の理解を助けられていると考えられる。

映像情報の助けによって、言語で説明する必要がなくなっているとは言え、映像を見ても分からない

ものについては、補足説明が（台詞の中に盛り込まれるかたちで）追加されることになる。これが、異質化につながり、以下のような例が生じる。

(24) これ、どこへ運びます？

Mr, where do you want the radio?

(00.07.19)

引越し屋さんが荷物を運び入れる時のセリフである。運んでいるのが大きな箱のようなもので、前面に操作パネルらしきものは映像から分かるが、これがラジオであることは（現代の特にごく若い）視聴者には非常に分かりにくいはずである。その理解を助けるために、目標テキストでは radio と言語化している。そうすることで「あんな大きなものがラジオなの（だったの）？」という、現代からの時間の距離を再認識させる働きをしている。²³

6. 結び

本稿では、吹き替え映画翻訳における受容化と異質化を2つの観点から考察した。それは、(2) に示す通り、言語圏の隔たりに起因するものと、時間の隔たりに起因するものである。翻訳すること自体が異言語／文化を紹介するという側面がある以上、受容化の事例が多くなるのは当然のことであると考えられる。今回の事例研究においては、言語圏の隔たりに起因するもの（特に受容化）がほとんどで、時間の隔たりに起因するものはごくわずかという結果となった。日本のことを英語圏の人々に分かりやすくするという方略が採られている一方で、昔はこうだった、こういう物があったといったことを言語化していないことが分かる。それは、映像による情報が大きな助けとなっており、もはや現代ではほとんど無くなってしまったものも（例えば、井戸や手押しポンプ、初期の電話など、活字のみの翻訳では訳者註などが必要となるようなところでも）、映像で理解（推測）ができるようになってきているからである。今後は、映像からの情報が得られない活字のみの翻訳においても、今回同様の分析を行い、検証してみる必要がある。

翻訳における受容化／異質化は程度問題であって、今回のように文単位で数え上げることにどれほどの意味が見出せるのかとも考えられなくもない。厳密には単位時間当たりの伝達情報量に基づいて算出・比較するべきかもしれない。ただし、その情報量をどのように定義し、算出するのことはまたさらに大きな問題となる。日本語と英語における語の規定の仕方も異なり、また、各語がその背後に背負っている概念（百科事典的知識の大きさ）も異なる（Lakoff 1987, Langacker 1987, 西村 2002, 靱山 2002, 他）。²⁴ 本稿では、概算ではあるが、少なくとも大きな傾向をとらえる（実証する）ことができたと言える。

今回の翻訳間のシフト（ズレ）の内そのほとんどを占める言語圏の隔たりに起因する受容化について

は、さらに詳細に具体的な例ごとに分析・考察する必要がある。これについては稿を改めて論じたい。特に、認知言語学的観点から個々の翻訳事例について考察したいと考えている。

さらなる発展としては、時代の流れに伴う（吹き替え映画）翻訳の変化を分析する手掛かりとなると考えられる（藤溝 2014）。²⁵ 今回分析に使用した作品は、原作は 1988 年に発表され、Disney 版の翻訳は 2005 年に成されたものである。以降、アニメ文化が世界的に流行している昨今の情勢を考慮すると、日本のものをそのまま知りたい、読みたい、感じたいという視聴者（読者）からの欲求が高まっていると考えるのが自然であろう。となると、英語圏側の出版業界・映画業界もその要求を汲んで、翻訳（者）へ翻訳での異質化を要請する割合が高まっていく（すでに来ている）可能性が大いにある。ここでまた、Venuti (1995) の指摘した課題に立ち返ることになるのであろう。

註および参考文献

- 宮崎充保 (2015) 平成 26 年度観光政策 Informix 「宮崎充保教授最終講義『コミュニケーションとしての翻訳』」. 講義配布資料, 2015 年 1 月 14 日, 於 山口大学経済学部.
- 宮崎 (2015) ではこの他にも難渋する点として、方言や階級（武家と町人等）による使用言語の隔たりや文物（現代ではすでに廃れてしまった物・事）の隔たりを指摘しているが、本稿では取り扱わない。
- Venuti, Lawrence (1995) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*, Routledge.
- 小倉慶郎 (2008) 「異化と同化の法則：foreignization と domestication はいかなる条件で起こるのか」『言語と文化』7, pp. 51-70.
- ここで、TL は target language (目標言語) を指している。なお、同化および異化は、それぞれ受容化および異質化のことを意味している。
- Manson International 社により *Warriors of the Wind* というタイトルで 1985 年に公開される。登場人物の名前を始めとして多くが無断で改変され、これに宮崎駿監督は激怒し、これ以降、作品の翻訳を許可するまでに相当の年月を要したとされる。
- 山田健太郎 (2005) 「英語版アニメ作品に見る翻訳の問題 (2) 『となりのトトロ』の場合」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』6, 273-284.
- 深谷輝彦 (2010) 「字幕と吹替の訳し分け：『となりのトトロ』の英訳」『言語と表現—研究論集—』7, 13-26.
- 使用した DVD の字幕を参考にはしたものの、全てが正確に字幕になっているわけではないので、その都度確認し、記録し直した。また、字幕翻訳自体を分析対象としなかったのは、画面上の表示時間に関わる語数の制約の影響を避けるためである。
- ここで、翻訳が全て文単位で行われるなどということ言うつもりは全くない。言語的な情報量を概算するためだけのものである。当然のことながら、笑い声、鳴き声、感嘆詞 (Wow! など) は参入していない。
- 例文の引用には目標テキスト DVD のインジケータを表示しておく。
- こうした事例も受容化であると考えられることもできるが、そうすると翻訳行為自体が受容化であるという命題に

突き当たる。ここではこの立場を取らない。

- ¹³ Nida, Eugene A. (1964) *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*, Brill.
- ¹⁴ ここで、映像の時間制限を考慮したために、日本語と同じような長さにせざるをえなかったのではないかと考える向きもあるかもしれない。しかし、映像ではこの台詞の話し手の口は見えておらず、その必要はほとんどない。さらに、後述するが、全体的な傾向として、同じ時間の間に話すことができる（活字にして比べた時の）量は、英語の方が多く（長く）なっている。
- ¹⁵ 今後の課題としては、音声言語による伝達において、単位時間当たりの情報量の差を、日本語と英語とで比較してみる必要があるかもしれない。
- ¹⁶ むしろ、言語圏の隔たりに起因する受容化として観察される事例が少なすぎると考える向きもあるかもしれない。それは、(10c) の分類をどのように行うかにも大きく依存する。
- ¹⁷ この例ではカウントする文の数としては同じ結果になるが、ここで指摘したいことは、言語化する情報量に差があることである。
- ¹⁸ 久野暲 (1978)『談話の文法』大修館、西光義弘 (1987)「認知スタイルと言語類型」『言語学の視界』大学書林、他。
- ¹⁹ Nisbett, Richard E. (2003) *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently, and Why*, Free Press, Nisbett, Richard E. and Takahiko Masuda (2007) “Culture and Point of View,” *Intellectica* 2-3, 153-172.
- ²⁰ 柏木厚子 (2016)「吹き替え翻訳にみる 受容化・異質化ストラテジーの分析 (1) -親族間の呼称の用法、及び呼称詞の機能に焦点を当てて-」『學苑』 905, 1-18.
- ²¹ 当然のことながら、ここでは映像の助けがあることで、訳者による注釈は必要なくなっている。つまり、異文化を感じ取れるのは言語の情報からではなく、映像情報からである。
- ²² 宮崎充保 (1998)「日本の文芸作品の翻訳 (3) 翻訳者の透明性と翻訳の透過性—『かわうそ』英訳の理論と実践—」『山口大学工学部研究報告』49(1), 147-163.
- ²³ 翻訳された2005年当時もすでに日本はハイテクロボットの国という印象があったはずであるが、そのイメージとのギャップを敢えて狙ったとも考えられる。
- ²⁴ Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, Langacker, Ronald. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. 1, Stanford University Press、西村義樹 (2002)「換喩と文法現象」、西村義樹(編)『認知言語学 I: 事象構造』, pp.285-311, 東京大学出版会、杉山洋介 (2002)『認知意味論のしくみ』, 研究社.
- ²⁵ 藤濤文子 (2014)「視聴覚翻訳における非言語要素の役割: 機能主義的翻訳研究の立場から」『異文化コミュニケーション論集』14, pp.7-17.

(2020年11月24日受理)